

一般演題1 O1-4

高気圧酸素治療介助に携わる看護師の教育評価と今後の課題～看護師の思いに着目して～

篠原美鈴 馬場麻里恵 草場 裕

佐賀大学医学部附属病院 高度救命救急センター

【はじめに】

当院の高気圧酸素治療（以下、HBOT）は2014年から稼働開始し、2021年までの約7年間で延べ1675件の治療を行ってきた。現在、治療介助を行う看護師はすべて当病棟（以下、ECU）の看護師である。教育を行うなかで、HBOTの介助を行う看護師は不安が大きいことが予想された。現在行っている教育について評価を行い看護師の思いや課題を明らかにすることで今後の教育に活かしていく。

【目的】

- ・安全に治療を行うことができるようにスタッフ教育の評価を行い、今後の課題を検討する
- ・危険性の高い治療介助を行う看護師の思いを評価しスタッフ教育に活かす

【方法】

当院でHBOT介助に従事したことのある看護師18名を対象に独自に作成したアンケートを使用し実態調査研究を行う。

【倫理的配慮】

当院の看護部看護研究倫理審査会の承認を得ている。承認番号2022-005

【結果】

当院でHBOTに従事する看護師18名を対象にアンケート調査を行い18名のうち、6～15年目が一番多く約68%であった。HBOTに従事したことのある回数は、2～5回が一番多く44%であった。HBOTに対して抱くイメージについて「不安」、「恐怖」、「危険」などのイメージを抱く看護師が約56%という回答を得た。その理由として、「爆発の可能性があるため」という回答が70%であった。HBOTに従事する際に抱く感情として、約61%の看護師が「不安」、「恐怖」、「緊張」を挙げている。そのうち、90%の看護師が爆発の可能性があることを理由としている。より安心して治療介助を行うために必要なこととして「経験」と答えた看護師が約

17%いた。その他に、「治療に入らなくても定期的にマニュアルの確認を行う」、「スタッフ間での情報共有を行う」という回答がそれぞれ11%あった。

【考察】

HBOTに従事する看護師は、6～15年目の看護師の割合が多いことが分かった。これは、おおよそ3年目以降の看護師が救急外来に従事し、ある程度慣れた看護師へOJTを行うことが多いことが影響していると考えられる。治療介助についてのことのある回数については2～5回が一番多く、勤務の状況や治療対象患者がいるかないかで、HBOT介助につく機会は看護師によって差がでてくる。調査結果から、HBOTに対して「怖い」、「不安」、「危険」などのイメージを抱く看護師が半数を超えていた。より安心して治療介助を行うために何が必要かという問いに対して、「経験」と答えた看護師が複数名いることも事実である。しかし、その「経験」を早く積むということも実際には困難である。経験が十分でなくても、他の看護師が経験した事例やトラブル発生時の対応方法などを情報共有することで自身の知識となり、不安軽減につながるのではないかと考える。

【結論】

不安軽減に必要なこととして「経験」と答えた看護師が複数おり、経験が少なくとも知識として情報があることで介助時の不安軽減につながると考える。治療介助マニュアルの定期的な見直しを促し、症例の情報共有を行うことが、ネガティブなイメージをできるだけ良くするための一助になると考える。